

## 手話について

有菌暢子

東京保健医療専門職大学 リハビリテーション学部 理学療法学科

### 【はじめに】

本学の特色である専門分野の周辺領域を学ぶ展開科目隣接他分野である「手話」。このコロナ禍のニュース等でも以前と比べて見るが増えてきた手話について知っていただく良い機会をいただいた。手話とはどういうものなのか、また手話を使用する聴覚障害者(ろう者)について、そして本学で学ぶ意義について少し述べたい。

手話について述べる前にまず聴覚障害についてふれたい。

聴覚障害とは周りの音や話し言葉が聞こえにくい、または聞こえない状態をいう。

どのくらいの障害なのか、例えば音は聞き取れるのか、全く聞こえないのかなど聞こえ方は人によって異なる。聴力の問題だけでなく、障害の場所(外耳、中耳、内耳、聴神経)、原因、時期、生育環境等によって聴覚障害に対する受け止め、アイデンティティも人それぞれであるため、聴力だけで聴覚障害者を分類し、定義することは難しい。

また音を聞くことができないため、声を出して話すことが難しい人もいる。耳からの音の情報が制限されてしまうため、文章を読み書きする力も人それぞれである。

耳の聞こえない人を表す言葉にはろう者、難聴者、中途失聴者、聴覚障害者等がある。

ろう者とは生まれつき、または幼少時に失聴し、主に手話言語でコミュニケーションをとる人たちをいう。

難聴者とは聞こえにくい状態ではあるが、まだ聴力が残っている人たちで、聴力が落ち始めた年齢や状況により聴力はさまざまである。

補聴器等を使用して音がある程度聞き取れる、会話ができる人もいれば、全く聞こえないわけで

はないがわずかな音しか入らず、言葉として認識することができないため、言葉を聞き間違えたり、体調によって聞こえ方が左右することもある人など個人差がある。

中途失聴者は生まれた時は聞こえていたが、その後何らかの原因(病気、事故、加齢)により聞こえなくなった人をいう。

言語獲得年齢により発語状況は違うが、話すために必要な音声言語を獲得してから聞こえなくなっている人の場合、自分で話すことはでき、文章の読み書きも問題はない。

聴覚障害者のコミュニケーション方法は障害の状況や生育環境などによって人それぞれである。1つの方法だけでコミュニケーションをとるのではなく、場所や環境に応じて自分を取りやすい方法をいくつも使用し、コミュニケーションを取っている。

一般的に相手の耳が聞こえないと分かったときに、まず声を大きくする、口を大きく開けてゆっくり話す、それでも通じていないと分かると紙に書くなどが行われる。

音がある程度聞き取れる難聴者や加齢により聴力が落ちてきた人には大きい声で話すことで聞き取りやすくなることもあるが、生まれつきのろう者やわずかな音しか入らない人にとっては大きい

声で話されても聞き取ることはできない。

耳からの音情報は入らないので、相手の口を読む読話(口話)、文字で書いてもらう筆談や身振りなどが聴覚障害者のコミュニケーションである。

口話は話し手の口の形を読み取ることで、簡単な、短い内容であれば読み取ることはできるが、読み取る力も人それぞれである。日本語は母音が5つしかなく、口の形、動きが似ていることばや同音異義語は口の形だけでは言葉として捉えられない。何と言っているかを推測しながら口元を見ているので疲労が大きく、読み取り間違いが多くなるため、口話だけのコミュニケーションは取りにくい。口話と身振りや口話と筆談など組み合わせる使用が望ましい。

そして目に見えることば、視覚言語である手話がある。手話とは主にろう者がコミュニケーションを取ったり、物事を考えたりするときに使う言語で、音声言語とは異なった独自の語彙や文法体系を持っている。手の形、位置、動きに加え、表情や強弱などを用いて、意見、気持ちや考えを視覚的に表現し、伝え合う言語である。

手話を使用するろう者は、口話、筆談ではコミュニケーションに緊張と疲労が生じてしまい、時にはコミュニケーションをとることをあきらめてしまうこともある。手話は手の動き等だけでなく、顔の表情、アイコンタクトなどで会話が成り立っていく。手話はろう者の言語であるが、ろう者だけでなく、音を聞き取りにくい難聴者、中途失聴者にとってもコミュニケーション方法の1つである。

本学で、なぜ手話を学ぶのか、それは理学療法士、作業療法士としての知見、スキルを存分に活かし、専門職としての幅を広げるためである。利用者や患者と直接コミュニケーションをとることで、信頼関係を構築し、的確にニーズを掴み、より良い支援ができる。

聴覚障害者からすれば、自分の言葉で直接話ができ、分からないときにはすぐに聞き返せる、希望を伝えられるなど納得、安心して治療やリハビリを受けることができる。

実際、リハビリや作業療法での手話通訳に行くことがある。リハビリ、特に下肢の場合、しゃがんだまま説明をされる理学療法士が多く、聴覚障害者はアイコンタクトもない、表情も見えないので話し始めているのかも分からないことが多い。

もちろん手話で全てを説明できるようになるまでは時間を要するが、聴覚障害者とのコミュニケーション方法を身につけ、日常会話程度の手話を覚えることにより利用者、患者との信頼関係を築いていく手助けになると考える。

#### 参考文献

- 1) 公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟「聴覚障害者とは」 <https://www.tfd.deaf.tokyo>
- 2) パンフレット「手話言語法の制定へ！ 手話言語でGO3」 一般財団法人全日本ろうあ連盟
- 3) 就労移行支援事業所チャレンジド・アソウ聴覚障害とは？ <https://challenged.ahc-net.co.jp/library/choukakyusyougai/>
- 4) 聴覚障害について知っておいていただきたいこと <https://ds.adm.u-tokyo.ac.jp/receive-support/hearing>